

地中海古代都市の研究 (113)

メッセネのアスクレピオス神域の泉水場

9. 建築歴史・意匠 - 4. 西洋建築史

正会員 ○米岡太志³⁾ 伊藤重剛¹⁾

ギリシア本土 メッセネ ファウンテン

林田義伸²⁾ 吉武隆一³⁾

1. はじめに

本稿は熊本大学ギリシア古代建築調査団(団長 伊藤重剛)が2003年夏に行なった実測調査で明らかになった、メッセネのアスクレピオス神域にある泉水場と考えられる遺構の現状を報告し、建築的復元の手がかりを得ようとするものである。

2. 遺構の概要

古代メッセネ遺跡は、北にアクロポリスでもあるイトメ山、東にエヴァ山を持ち、市域は山裾の南北方向の緩斜面に広がっている。アスクレピオス神域はメッセネ市域のほぼ中央に位置し、本稿で紹介する泉水場は、アスクレピオス神域の北東隅に位置し、この神域に面する部屋の中で唯一床が張られ、かつ排水システムが施されている部屋である。

現在発掘調査を行っているP・テメリス氏²⁾によると、この部屋にはかつてアスクレピオス神とその二人の息子マカオン、ポダレイリオスの像が建っており、美術展示室のような役割であったとされている。しかし、同氏の記載にもあるように、この部屋には水槽が配置され、水を供給したと見られる樋口の痕跡と排水管があり、明らかに水を湛える施設であったので、本稿では本施設を一応アスクレピオス神域の泉水場と呼ぶ。

3. 調査方法

平面の実測は、トータルステーションを用い、ストアのスタイロベイト北東隅の基準点から基準線を引き、エスロンテープ、コンベックス、曲尺等を用いて基準線からのオフセット量を測る方法で行い、遺構の平面図を50分の1の縮尺で作成した。また、中庭の排水溝へ繋がる排水溝と、東西方向へ伸びる素焼き製の水道管が2003年調査中に出土し、50分の1の縮尺で平面図を作成した。

内部立面図・断面図は写真測量³⁾によって作成した基本図面をもとにエスロンテープ、コンベックス、曲尺、下げ振り、水準器、水系等を用い東内部立面図、北内部立面図、西内部立面図、南北断面図をそれぞれ50分の1の縮尺で作成した。

周辺に残る泉水場の構成部材と思われる石材は、コンベックス、曲尺を用いて実測し、10分の1の縮尺で図面を作成した。

4-1. 平面

泉水場は、トイコベイト内法寸法で東西方向7.69m、南北方向3.86mの矩形で、東西北の3方向は石壁に囲まれている。ストアに面する南面は開口しており、開口部は壁端柱(アンタ)の間に2本の柱が建つ、「ディスタイル・イン・アンティス」の形式である。

壁端柱の正面幅は、西が0.30m、東が0.31mであり、間に建つ2本の半円柱付き角柱の正面幅は西が0.56m、東が0.57mであった。西壁端柱とこれらの柱による3柱間は心車で、西から1.99mで、2.05m、2.00mであった。

北隅中央には、外法寸法で東西3.64m、南北1.70m、高さ0.88mの石造の水槽があり、これを構成する石材の厚さはおよそ0.20mであった。

床面は矩形の舗石が敷き詰められており、トイコベイトに接する部分からおよそ0.10m内側よりおよそ0.08m低くなっている。舗石の配列は、水槽のある中央部分と左右の部分で異なっている。東側は2×4列と規則的である。中央部は、南北方向に3列並ぶが、各列で敷石の数や大きさが異なり、舗石の数は、北から1列目が4個、2列目が4個、3列目が3個である。西側は東側と同様であるが、中央に近い列は舗石が破損ないし亡失している。舗石が失われた部分には、舗石の下には素焼きの破片を確認できる。また壁に接する舗石は接する部分が高くなっており、床の水が壁内に漏れないようになっている。南西隅の舗石は南側に穴があげられており、この穴は後述のストア床下の排水管へ通じている。

4-2. 立面・断面

東西北の3方向の壁は下から順にトイコベイト、オルソスタット、及び表面の粗い切石の整層積みで壁本体で構成されており、石灰岩で出来ている。トイコベイトの高さは0.23mで、オルソスタットの高さは0.64mであり、上部の荒い切石が7段から9段積まれている。北面の荒い切石の3段目、中央には幅およそ0.24mの隙間がある。また同面の荒い切石の壁には、仕上げのスタッコが一部残っている。入口の柱及び壁端柱は、砂岩でできており、壁端柱には仕上げのスタッコが残っている。

4-3. 石材詳細

最南列東から3つ目の舗石の北西隅と、北隅中央には人為的に加工された穴が見られた。水槽は、長手方向(東西方向)に2枚、短手方向(南北方向)は

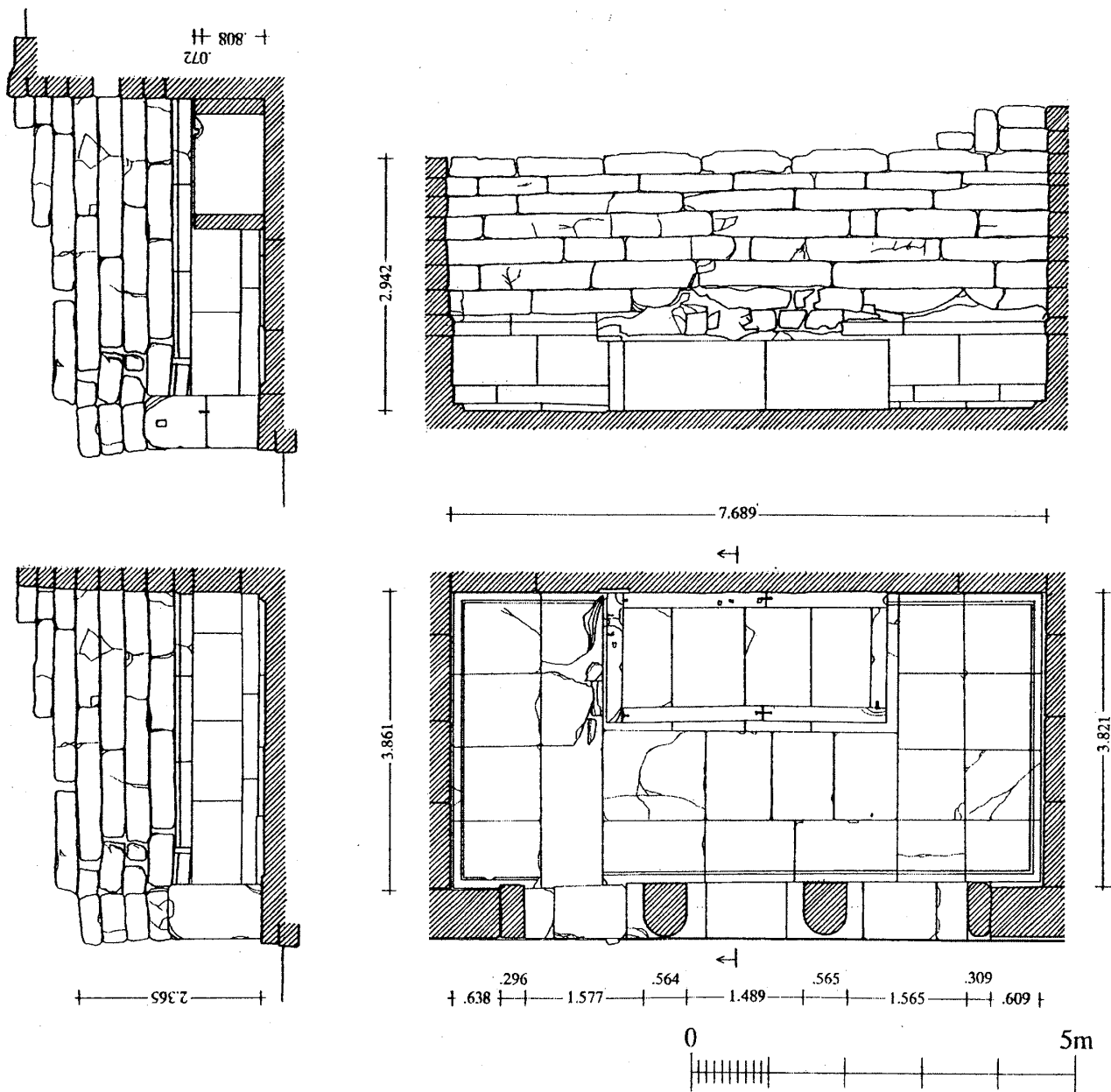


図1 ファウンテン平面図・西面及び北面内部立面図・南北断面図

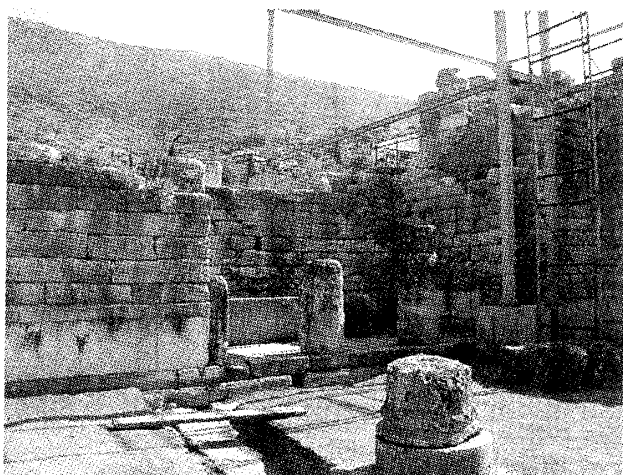


図2 南西より泉水場を眺める

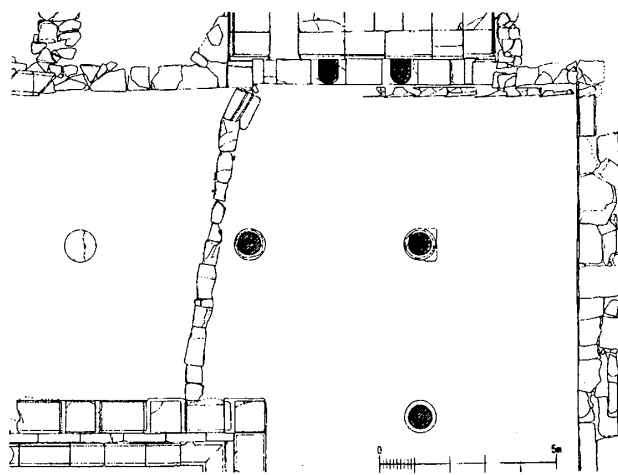


図3 水道配置図

それぞれ1枚ずつの計6枚の石材によって作られている。各々の接合部分上部は、鏝の痕跡が見られる。水槽の西部材の北側上部は、0.07mの高さの切り込みがあり、オーバーフローした水が流れ出すようになっている。入り口に建つ2本の半円柱付き角柱はそれぞれ、柱礎がなく、スタイロバイトから直接立っており、円柱部分にはフルーティングが施されている。

施設周辺に残る入口の柱ドラム部材1個と、アンタキャピタル（壁端柱の柱頭）部材2個についても実測調査を行った。入口の柱のドラム部材は、砂岩製で角柱部分は、幅0.53m、奥行き0.64mで、円弧の半径は0.23mであった。高さは0.79mで、円弧部分にはフルーティングが施されている。フルートの数は10本で、その彫り込みは互いに接し合っている。角柱部分の3面の表面の上下端には、太柄痕と思われる施工跡が見られた。

2つのアンタキャピタル（壁端柱の柱頭）も、砂岩できており、風化されて状態が良くないが、それぞれに2段のモールディングがついている。これら2つの石材の上面中央には、太柄穴ないし、石材の持ち上げのために開けられたと思われる穴が開けられている。

4-4 導水システム

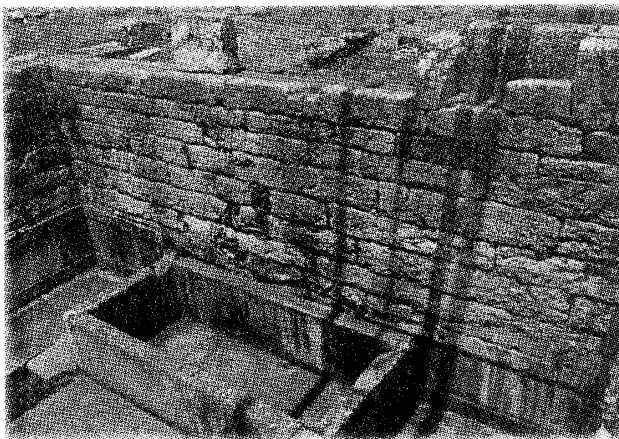


図4 北側壁面及び石桶

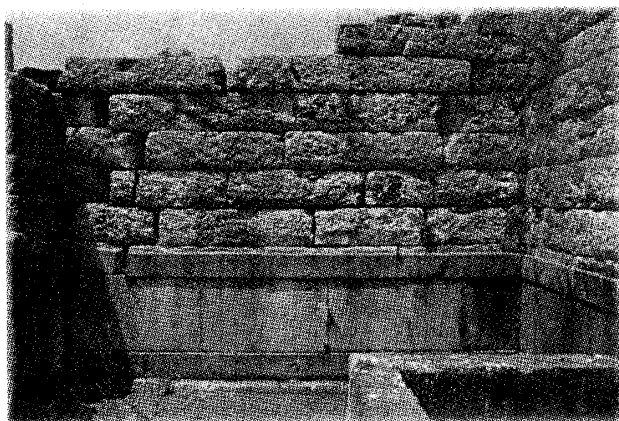


図5 西側壁面

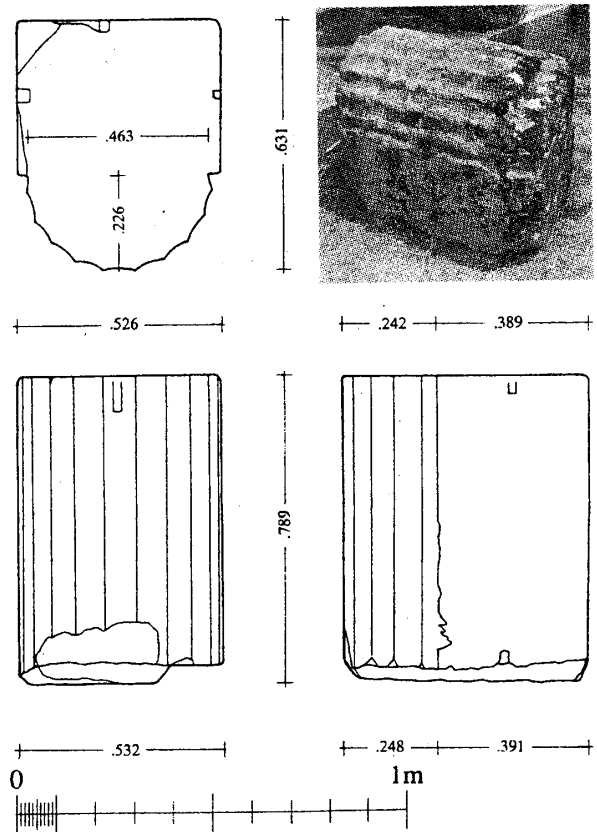


図6 コラムドラム部材図面及び写真

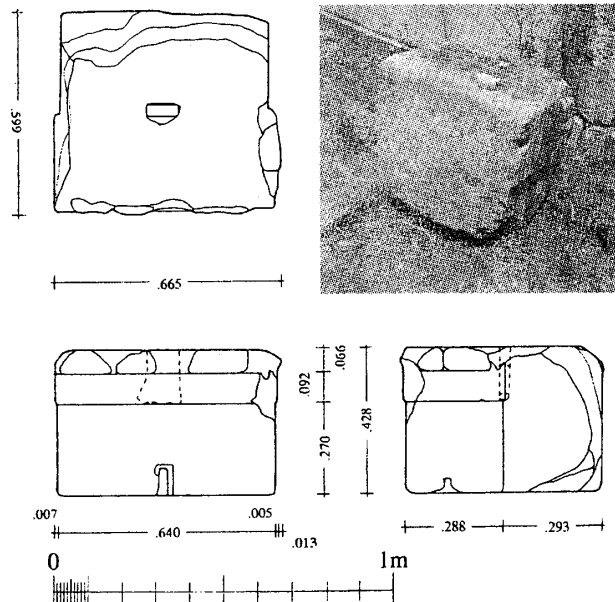


図7 アンタキャピタル部材図面及び写真



図8 北側壁面スタッコ跡

中庭の排水溝へ繋がるストア床下の排水溝は、オルランドスの調査⁴⁾によって描かれた図面では、その存在が示されているにとどまっている。この排水溝は石造で、泉水場の南西隅から始まり、中庭の周囲を囲む排水溝の北東隅へ直線的に繋がっている。泉水場に接する部分を除き、石造の蓋で覆われていた。泉水場に接する部分で観察すると、管の幅は0.20mで、深さは0.10mであった。

泉水場の入り口の敷居に沿って、東へと延びる水道管が敷設されている。素焼き製の先細りになった管を、数センチずつ重ねて7個連結したもので、泉水場の入り口中央付近から、ストアの東側の壁の手前まで続いているが、泉水場との繋がりは確認されない。

5. 復元的考察

開口部に立つ2本の柱には柱礎が無く、柱のドラムと思われる石材のフルートの彫り込みが、互いに接しあってアリスをなして、アンタキャピタルと考えられる2つの石材の装飾を、エキヌス、アバクスと捉えると、開口部はドリス式オーダーで作られていたと考えることができる。

P・テメリス氏の記載²⁾によると、泉水場は、古代メッセネの中で唯一化粧を施された施設であったということだが、壁面にスタッコの痕跡が確認できることから、オルソスタットから上の荒仕上げ石材による壁本体の部分は、すべてスタッコで仕上げられていたものと考えられる。この点はストアの後壁の部分と同じである。このスタッコの壁には、デルフィのヘレニズム時代の住宅のように石の仕上げを模倣した絵などが描かれていたものと推測される。

北壁面中央の隙間は、この他に導水管等が見あたらないことから、おそらくライオンの頭部彫刻のついた樋口がついていたと思われ、ここから水が流れ出て水槽に水が溜まるようになっていた。西側の床面は一部が破損しており、床の下には素焼きの水道管の一部が残っているが、水槽との繋がりは確認出来ない。したがって、水槽からオーバーフローした水は、水槽北西隅の上面の窪みより床面に流れだし、床面の清掃などに使われたのであろう。また沐浴等でそのまま床面に流れた水も、南西隅の排水口から、ストア床下の排水管に排水されていたと推測される。

東西方向に延びる水道管は、東に向かって先細りになっていることより、水は西から東へ流れるようになっていたと言えるが、東端で壁で止まり、またこの泉水場と繋がっていない。したがって、泉水場内床下の水道管と同様、現在の泉水場が出来る以前に使用されたものではな

いかと思われる。この点については、今後精査が必要とされる。

神域である中庭の周囲を囲む排水溝は露出しており、ファウンテンからの水が絶えず流れていたとするならば、本施設は、市民の生活用水を補う場という機能に加えて、水を演出として用いるための装置としての機能もあったものと考えられる。メッセネ市域の北部には、アゴラに隣接して、「アルシノエ泉水場」と呼ばれる泉水場があり、この泉水場は40メートルの長さの貯水槽を持つ⁵⁾。都市域は北から南へと傾斜しており、給水システムは都市全体に及んでいたと推測される。アスクレピオス神域の泉水場は、アルシノエ泉水場よりも低い位置にあり、両施設の導水システムが直接繋がっていたかは現在まだ不明であるが、いずれにせよ、この泉水場が都市域全体の給水システムの一部をなしていたことは確かである。

6. まとめ

今後、他の泉水場と比較研究をしなければならないが、ウィッチャーリは、ディスタイル・イン・アンティス形式の泉水場はしばしば見られる平面形式としており、この泉水場もその形式の内の一つである。⁶⁾ 今回の調査により遺構の現状を知ることができた。P・テメリス氏はここを彫刻家ダモフォンの作品が置かれたギャラリーだとしているが、一見すると明らかに水を使用した施設つまり泉水場と判断されるので、これら二つの機能を併せ持った施設だったのかもしれないが、この点については慎重に検討する必要がある。今後の課題として、水道系統の解明、復元に当たり部材どうしの整合性の確認、隣接するストアと本施設の屋根架工の納まりの検証、他の泉水場との比較検討などが挙げられる。

注

1) 調査の途中経過については、林田義伸・伊藤重剛「古代都市メッセネのアスクレピオス神域の調査と復元」平成12～14年度文部科学省科学研究費補助金成果報告書、建築技術に着目した地中海建築の比較研究および地中海建築情報データベースの拡充、平成15年3月、pp.1-19。

2) Petros G. Themelis, *Ancient Messene Site and Monuments*, Athens, 1998, p.31

3) 写真測量は、都城高等専門学校講師 中村裕文氏の協力を得た。

4) オルランドスの発掘に関してはOrlandos A.K. "Excavation of Messene" *Ergon*, 1958, pp.142-146; 1959, pp.110-117; 1960, pp.159-167; 1962, pp.119-127; 1971, pp.145-163; 1972, pp.67-80; 1973, pp.79-82.

5) Pausanias, "Description of Greece" ix.36.6, Loeb Classical Library, によるとアルシノエ泉水場は、イトメ山頂にあるクレブシュドラの泉から水が引かれていた。

6) ウィッチャーリ著・小林文次訳「古代ギリシアの都市構成」相模書房、昭和55年、p.233

1) 熊本大学助教授 工博

2) 都城高等専門学校教授 博(工)

3) 熊本大学大学院自然科学研究科

Assoc. Prof., Kumamoto University, Dr. Eng.

Prof., Miyakonojo National College of Technology, Dr. Eng.

Graduate School of Science and Technology, Kumamoto University